

【みすず書房：50頁～68頁】

フィエットおじさん／パパ・ラ・フィエット：56歳の靴職員

- ・毎日のように口笛を吹き、靴の裏をたたき、しゃがれた声で流行歌や革命歌をうたう
- ・若い頃はパリコミュンの実現に参加し、死刑判決を受けた後に追放されたことが誇り
- ・革命主義的な集會に精勤、コキヤールにひどく共感
 - d ・クリストフが一層の好意を感じている
 - ・ジョシュと共に民衆集會で最も重んじられる一人
 - ・生粋のフランス人
 - ・ジョシュと同様労働者として優秀、愉快な談笑と酒が好き。

エマニュエル：13歳。フィエットおじさんの孫。靴職人の弟子でもある。

- ・せむしで病身。発育不良。
- ・母親は17歳で労働者とかけおちしたが一人でエマニュエルを育てる。
情夫への愛情と憎しみを子どもエマニュエルに移し、溺愛して乱暴に虐待して気を狂わす。
エマニュエルが6歳のときに死んだ。
- ・祖父にはエマニュエルを扱う流儀があった。
手荒く扱う。多様な罵言。耳を掴み引っ張る。頬を打つ。靴職人の弟子として朝から晩まで。
反聖職主義的な教養を教え込む。
- ・オーレリーの居酒屋で粗野な言葉を投げられた時には痙攣的に顔がゆがみ、
革命主義的な或る文句が言われたときは、栗色のびろうどのような子どもの眼が、
未来の幸福を夢見るために恍惚として輝く。
⇒オリヴィエがエマニュエルを初めて見た瞬間。
オリヴィエは善意からの直感で少年の心の中を見て取って微笑した。
民衆の誰かと話し合うのはいつも気づまりだったがエマニュエルとは話そうと努めた。
- ・オリヴィエは少しも大声を出さず、少しも手荒つぽ言葉を言わない静かなオリヴィエの魂の引力
に引かれ、この魂といっしょにいれば路上でも乱暴な目にあわされなくてすむ。
- ・数百年に渡る年月が語った不思議な力のある書物がたくさんあるオリヴィエの部屋。少年の心に一
種の宗教的な畏敬の気持ちを起こさせた。
- ・オリヴィエの質問によるこんで答えたが、傲慢な粗野さが時々急に顔を出すのだった。
- ・世界の改造に懐いているおかしい、そして感動させる信念。(その信念が人間を改造することは不
可能だとオリヴィエは知っていた。しかしどんな信念も美しい。)
- ・文学のうちで最も彼を感動させたのはヴィクトル・ユゴーの史詩的な熱情表現だった

朗読① みすず書房：55頁下段最終行～56頁下段

トルイヨー：フィエットおじさんの旧友。紙商の主人。

- ・店はフィエットおじさんの通りを挟んで向こう側にあった
- ・連れだって居酒屋にでかけ、半世紀間のつきあいのためおどろくほど話が弾む
二人とも社会革命と未来の理想的な勤労社会とを確信していた。
- ・フィエットおじさんは自由の中にも確固たる腰の強さと専制主義とを奉ずる本来のフランス人
- ・トルイヨーはジョシュに熱狂していた。
- ・絶え間ない楽観主義。物事をそうあって欲しいと望む通りの姿を見た。そうでない時は見ない。
- ・二人とも現実の感覚を持っていない、空想的な、齢をとっている子どもだった。
- ・革命という名を聞くだけでえ陶然と酔っている。もはや美しい伝説であった。
- ・反聖職主義

アレクサンドリー夫人：トルイヨーの姪と一緒に暮らす。トルイヨーとは異なり信心深い。

- ・小柄で髪は濃い栗色、ぽってりして目に精気があり生まれつき饒舌。
- ・夫は商務省の編集人の一人だったが死別した
- ・生意気なブルジョワ気取りな姪は自分が店に居ることで店の主人に恵みを施している
- ・身分にふさわしく王党派であり聖職主義
- ・叔父を改宗させると心に誓っており、叔父に様々な陰謀をしかけていた

ラネット：アレクサンドリー夫人の娘。13歳。

- ・病気ばかり。数カ月以来、坐骨炎のために寝床に伏せて半身に福木をつけていた。
- ・目は負傷した牝鹿のよう、皮膚にはつやがなく、頭が不釣合に大きい。
- ・顔出しは上品で表情に富んでいた。可愛らしい鼻、あどけない感じの良い笑顔。
- ・一日中何もしないなかで信心だけが熱烈なものになっていった
- ・老人の服の裏に護符を縫い付けたり、ポケットの中に念珠の珠を入れたりした
- ・エマニュエルとは幼いときから毎日のように会う友だちだった

朗読② みずず書房：62頁下段12行目～63頁下段

エマニュエルは仕事場の仲間といっしょにいた。彼らはエマニュエルを好いてはいなかった。

(中略) その日彼らは「革命」について、また未来の社会について論じ始めた。エマニュエルは感激した。その彼のその感激ぶりが他の仲間の眼にこっけいに見えた。仲間の一人がつつけんどんにエマニュエルをどやしつけた—

「未来の社会ではお前なんぞはまっさきにお払い箱さ。お前はあまりに醜すぎるんだ。未来の社会には、せむしの人間はもう存在しないだろうよ。せむしは生まれたとたん水の中に放り込まれるんだ」

(中略)

「いじめられたの？」

「ええ」

「ひとが君にどんなことをしたの？」

少年は心を打ち明けた。自分の姿は醜いのだと彼は言った。彼の仲間の人々は彼に、彼らの革命は彼のためではないと言ったのだということを、彼はオリヴィエに話した。

「革命はね、エマニュエル、また彼らのためでもないし僕たちのためでもないのだよ。それはただ一日だけでできることではないのだ。僕たちよりも後に来るだろう人々のためになされていることなのだ。」

少年は、そんなにも遠い未来のためのことだと聞かされてがっかりした。

「君みたいな無数の少年たちに、無数の人々に、君は幸福を与えるために働いていると考えると愉快的な気持ちにならないかね？」

エマニュエルは溜息をついて言った—

「自分自身がいくらかは幸福になれば、それもまたどんなにいいことでしょう」

「エマニュエル、恩知らずであってはいけないよ。君はすばらしいことがいちばんたくさんある時代に、いちばんみごとな都市に生きている。君はばかじゃない。君にはいろいろなことが見分けられる。自分の周りで見えて愛する値打ちのあるすべてのもののことを考えたまえ。」

オリヴィエはエマニュエルにいろいろなものを挙げて示した。

少年はそれを聴いて頷いた。そして言った。

「そうです。でも僕はいつまでもこんな肉体の中に閉じ込められているのですしょう！」

「いや、そうじゃない。君は自由になることだろう。」

「そしてそれは万事おしまいするときでしょうよ」

「それについて君は何を知ってものか？」